ジョルジュ・サンド『モープラ』
—なぜエドメはベルナールの優位に立つのか—
George Sand *Mauprat*
The Relationship between Edmée and Bernard

渡邉　菜月
WATANABE, Natsuki

摘要

This paper examines how Edmée in George Sand's *Mauprat*, influenced by Jean-Jacques Rousseau's *Émile*, assumes the dual role of teacher and mother, thereby enabling Bernard's development. In *Mauprat* Bernard grows, by owing to Edmée's love. For this reason, *Mauprat* is often studied along with the educational theories of *Émile*, and a discussion of *Mauprat's* themes often include a discussion on the role of an educator. However, Edmée's role in Bernard's life is not only that of an educator but also of a mother. Therefore, this paper examines how Edmée is influenced by *Émile* in her two roles as educator and mother in *Mauprat*. Though Edmée uses the educational theory of *Émile* to educate Bernard, she herself contrasts with Rousseau's ideal woman. The reason for this is the education she received as a child and the Mauprat family lineage. Her mother died when she was very young, and she was raised by her father, priest Aubert, and philosopher Patiance without being bound by social norms. She is also very brave, having inherited the fierce temperament of the Mauprat clan. Therefore, Edmée is not a woman subservient to men, but an independent individual who is not dependent on them. Bernard praises her as "one of the most perfect women in France." Such perfection fulfills the qualities of an educator as described by Rousseau, who states that an educator one must be perfect as a human being. For Bernard to grow, Edmée assumes the role of Bernard's teacher. She adapts and applies the educational theory presented in *Émile*. In *Mauprat*, the educational method differs from that of *Émile* in many ways. This is because *Mauprat* highlights the importance of experience and a more practical pedagogy. Therefore, Edmée puts the educational theory of *Émile* into practice with the priests and experiences repeated failures and successes. Furthermore, Edmée acts as Bernard's mother. This is not only because of her innate maternal qualities but also because he needs the nurturing. At the time, a new model of motherhood was becoming popular in France. *Émile* significantly contributed to that. The model entailed the mother take full responsibility for her child's development. In particular, a mother's discipline was deemed necessary for a child's moral development. To help Bernard, whose mother had died when he was a child, grow not only intellectually but also spiritually, Edmée guides him like a mother.

キーワード：*ジョルジュ・サンド　モープラ　教育 エミール　女性像*
Keywords: George Sand, *Mauprat*, education, *Émile, ou de l'éducation,* female figure

１．はじめに

『モープラ』（1837）は、ジョルジュ・サンドの作風の転換期にあたる作品として重要である。サンドはデビュー作の『アンディアナ』（1832）から一貫して、男性に隷属する女性の不幸な結末を描いてきたが、この『モープラ』が執筆された頃から幸福な結婚で物語を締めくくるようになる。『モープラ』は、粗暴で無教養な主人公のベルナールが、聡明で勇敢なヒロインのエドメの一途で粘り強い愛情に導かれ、「野性の子ども（un enfant sauvage）[(1)]」から「文明化された人間[(2)]」へと成長する物語である。このように、女性が男性を導き、幸せな結末に至るという構図は、『モープラ』以降好んで描かれるようになる。同時に、この構図を実現させるために、ヒロイン像が、男性に虐げられるか弱い女性から、エドメのように主体的に男性に働きかけていく女性に変化する。男性を導く女性は『モープラ』以降よく描かれるようになるが、『モープラ』において、エドメとベルナールが年齢差がないにも関わらず、女性が男性を導く立場になるという点は他の類似作品とは異なる。加えて、エドメの、単にベルナールと恋愛関係にあるだけでなく、ベルナールの教育者と母親という二重の役割を負い、彼を導くという姿は、サンド作品のヒロイン像において特異なものである。

ベルナールの成長の物語としての側面が強いこの『モープラ』は、これまで、ルソーの『エミール』（1762）と多く比較研究がされてきたが、それらは、教育者の役割について論じたものが多い。そこで本稿では、ベルナールを導く存在であるエドメが『エミール』の影響をどのように受けているかを、教育者だけでなく、母親を加えた二つの役割から考察する。

２．エドメの人格形成と『エミール』

『モープラ』は、フランス革命前のフランス中部のベリー地方を舞台とした、モープラ一族の本家と分家の物語である。本家は「ひかがみ切りのモープラ」つまり、「殺し屋モープラ」として恐れられたが、分家は善良で教養のある人々だった。主人公のベルナールは幼いときに、両親を亡くし、本家で育てられ、野蛮で無教養な男性として成長した。それに対して、エドメは分家の一人娘で、才気に満ち、美しく勇敢な女性だった。ある日、ベルナールは、本家の館に迷い込んだエドメと出会い、恋に落ちる。彼女を助け出す代わりに、自分のものになることを約束させ、ベルナールはエドメと館を抜け出し、分家の館で生活するようになるのだった。

ベルナールがエドメを一目見て恋に落ちたように、エドメもベルナールに恋をする。しかし、

誇り高いエドメは、まるで「野性の子ども」のようなベルナールに恋心を抱いてしまった自分を受け入れることができない。このジレンマを解消するために、エドメはベルナールに教育を施し、「文明化された人間」へと成長させることを決意する。その際、エドメは、ジャン＝ジャック・ルソーの『エミール』を実践する。というのも、彼女自身が成長の過程で、ルソーの思想に深い影響を受けたからだ。エドメが七歳の時、母親は腸閉塞で亡くなった。そのため、彼女は父親とオベール神父から教育を受ける。

> 幼い頃に母親を失ったエドメは、彼女を信頼しきった、善良で投げやりな父によって若々しい霊感に委ねられていたため、ほとんど一人で人格形成をしました。彼女に初めての聖体拝領を施したオベール神父は彼自身が魅了されていた哲学者たちの書物を読むことを少しも彼女に禁じませんでした[(3)]。

このオベール神父の心を捉えていた哲学者たちとは、正統なカトリックの教義からかけ離れたルソーを初めとする哲学者らのことである。オベール神父は、特にルソーの影響を大いに受けており、自らの信仰に反するとは理解しつつも、『エミール』に登場するサヴォア地方の助任司祭を信奉していた。そのため、彼の教育を受けて成長したエドメは、「キリスト教の崩壊を準備していた哲学と批判精神を禁じるキリスト教[(4)]」の両方に忠実である、という一見矛盾した精神を育むこととなる。その結果、ルソーに関わることとなるとエドメは、「ルソーが意見を述べると、エドメは何も反対が出来ないほど[(5)]」ルソーの忠実な信奉者となるのだ。

しかし、エドメはそのようにルソーに影響を受けたにも関わらず、ルソーが理想の女性として示した『エミール』のソフィー[(6)]と対照的な存在である。その要因は、彼女の幼少期の教育とモープラ一族の血筋にあると考えられる。ルソーは、男女の役割は生まれつき異なるため、女性は男性と同じ教育を受けるべきではなく、女性は「女性にふさわしい知識だけを学ぶべき[(7)]」と考えていた。さらにルソーは女子教育について次のようにも述べる。

> 女性の教育はすべて男性に関連させて考えなければならない。男性の気に入り、役に立ち、男性から愛され、尊敬され、男性が幼いときは育て、大きくなれば世話をやき、助言をあたえ、なぐさめ、生活を楽しく快いものにしてやる、こういうことがあらゆる時代における女性の義務であり、女性に子どものときから教えなければならないことだ[(8)]。

ルソーは、女性は男性を補完する存在であるため、その役割を果たすための教育が必要だと考えていたのだ。そして、そのような教育を施すことは母親の仕事であると考えていた。しかし、エドメは母親を幼いときに亡くしているため、彼女は社会的に求められる女性の役割のた

めの教育を受けることはなかった。むしろ、父親のユベールやオベール神父が彼女の意志を尊重し、自由に成長させたことによって、エドメは当時の社会規範に囚われない女性として成長することとなる。このように、ルソーが示す教育とは正反対の幼少期の教育を受けた結果、エドメは、同時代の女性よりも高い知性と教養を備え、自由な思想を抱く女性となった。

こうした精神に加えて、彼女には生まれながらの勇敢さや不屈の自尊心が備わっている。エドメは自分の性質について次のように述べる。

> 私はモープラの人間で、不屈の誇りを持っているので、男性の横暴には決して我慢しないでしょう。恋人の暴力だって、夫の平手打ちだって同様です。懇願されても拒否するのに、力には屈服するというのは従属した魂や卑怯な性格の人がすることでしかないです[9]。

エドメは理不尽に男性に付き従うことを嫌悪し、当時の女性の在り方も軽蔑している。この姿は「正しくないことにさえがまんをし、夫が悪いときでも不平をいわずに耐え忍ぶ[10]」ことを求められた当時の女性の姿とは正反対である。この彼女の大胆な性格は、作中で常にモープラの血筋に由来すると強調されている。

> 誰かが私のことを怒ったり、脅かしたりすれば、<u>強い家系の血</u>が息を吹き返し、敵を打ち砕くことが出来ないなら、私は腕組みをして、敵が私を怖がらせようとする哀れさをあざ笑い始めます[11]。

エドメは、モープラ一族の激しい気性によって、自分は男性と張り合う様な強気な一面を持つと繰り返し述べている。こうした側面は、当時としては男性的なものであり、忍耐強く男性に付き従う女性の姿とは対照的である。また、その結果として彼女は、生来の優美さや陽気さも合わさって、「柔和で愛想のよい女主人であると同時に、誇り高く、危険を恐れない若い女性[12]」となる。つまり、エドメは、ソフィーのように男性に従属する当時の女性像を破り、両性具有的で男女の長所を兼ね備えた完璧な存在として描かれているのだ。この姿について、80 歳をこえたベルナールは当時を回想して、「フランスで最も完璧な女性の一人[13]」だったと述べる。

エドメのこうした、当時の理想の女性像の枠組みから逸脱した姿は、彼女が、男性を補完する存在としての非力な女性ではなく、男性に依存しない独立した個人であることも示している。このような姿に関して、井下継実は、「教育者としての資質を全て持ち合わせた人物[14]」である、と指摘している。エドメが、ベルナールと同い年の女性であるにも関わらず、ベルナールだけでなく、他の同年代の男性をしのぐほどの完璧な人格を得ているという点は、ルソーが述

べる「その人自身が人間として完成していなければいけない[15]」という教育者の資質を満たすことにもなっているのだ。これは、エドメがベルナールの教育者の立場に立つことにおいて重要な意味を持つ。

以上のように、エドメはルソーの影響を受けたオベール神父からの教育と、放任的な父親によって、当時の女性としては考えられない自由な思想を持ち、生来の性質と合わせて、ルソーの理想とする女性とは正反対の姿として立ち現れることとなる。しかし、それは同時にルソーの示す理想の教育者の資質を満たすものである。ここに、サンドがルソーの思想に共感しつつも、女子教育、ひいては女性の性質に関しては、正反対の姿勢を取っていたことが指摘できる。サンドは自身の経験も踏まえ、女性を束縛する結婚制度や社会規範から自由になるためには、女性への適切な教育が必要だと感じていた。女子教育の軽視が、女性の男性への隷属を促していると考えていたのである。これに関して、西尾治子は、1837 年に新聞『ル･モンド』で連載された『マルシーへの手紙』をもとに「サンドは女性が男性と同じ教育を与えられれば男性より劣る存在ではなく、場合によっては男性をもしのぐ可能性があると主張している[16]」と指摘している。実際にサンドは、エドメ同様に、女性の規範に縛られない教育を子どもの頃に受けている。制限されることのない自由な読書は彼女の思想を広げ、結果として、サンドは大人になるとフランスの文壇で大いに活躍する女性作家となった。これは女性を家庭に押し込めようとするルソーの主張とは対立するものだ。サンドは自身の経験を元に、子どもの教育がその後の在り方を左右するということを主張しているのだ。

以上のように、エドメはルソーの思想の影響を受けつつも、彼の理想の女性像とは正反対の存在として現れ、同い年でありながらもベルナールを「文明化された人間」へ成長させることとなる。このことを踏まえ、次にエドメがどのようにベルナールを導いたのか「教育者と生徒」という関係から考察する。

3.「教育者と生徒」の関係

ベルナール老人は、教育者としてのエドメの様子を回想して、次のように述べる。

> エドメは自分が私の教育に関心を持っていることをあからさまには見せませんでした。彼女は、自分の心づかいを私に対して隠さねばならないと考えていたのでしょうが、それはおそらく間違いでした。そうであればよりいっそう、私は勉強に奮発し、熱心になったでしょう。しかし、この点において、彼女には『エミール』が染み込んでおり、彼女は愛する哲学者の一貫した思想を実践していたのです[17]。

このようにエドメは、ベルナールの「勉強において一種の影の指導者[18]」となり、家庭教

師役を務めるオベール神父に教育の方針を示していた。これは、「子どもをとりまく事物の背後に身を隠し、自らの意図を子どもに知られることなしに、子どもの本性を損なうものを徹底的に排除していく[19]」というルソーの教育者像の実践の一つである。また、エドメは『エミール』で登場するサヴォア地方の助任司祭に倣った教育を実践する。彼は、書物の抜粋を通した間接的教育を行った。助任司祭は、ある青年に、彼の教育を考えているそぶりを見せずに、複数の書物からの選文の作成を依頼した。その作業は、青年の精神を無意識のうちに高めるものだった。「他人の美しい行為の物語によって青年の心に気高い熱意[20]」を呼び起こし、自発的に自身を高める意識を起こさせたのだ。

エドメは彼に倣って次のように実践する。

> 晩になると、彼女はお気に入りの本を読み直したいという口実で、コンディヤック、フェネロン、ベルナルダン・ド・サン＝ピエール、ジャン＝ジャック、モンテーニュ、そしてモンテスキューの一節まで、神父と代わる代わる音読したものです。それらはもちろんあらかじめ、私の力に応じて選ばれていたので、私はかなり良く理解することができ、そのことに密かに驚きました。というのも、昼間私がそれらの本を行き当たりばったりに開いても、一行ごとに立ち止まらなければならないことがあったからです[21]。

このように『エミール』の教育論の実践が見られる一方で、『エミール』とは異なった教育方法もよく見られる。それは大きく分けて三点ある。

一点目は、ラテン語の教育についてだ。『エミール』では、ラテン語の必要性について、次のように述べられている。

> 語学そのものを学ぶのはつまらないことだ。語学の効用は人が考えているほど大きなものではない。しかし、語学の勉強は一般的な文法の研究に導く。フランス語をよく知るためにはラテン語を学ばなければいけない。話す技術の規則を理解するためにはこの二つの国語を研究し比較しなければならない[22]。

しかし、エドメは、「贅沢な学問のために数年を費やすのはもう遅すぎるし、重要なのは、精神を言葉で飾る代わりに、思想によって私［ベルナール］の心と理性を形成すること[23]」だと考え、ベルナールにラテン語を学ばせなかった。そのため、エドメは、前述したサヴォア地方の助任司祭を真似た書物の引用を通じて、精神の成長を促すのだった。しかし、それは同時に『エミール』で「話の内容を分析することを学ばせ、雄弁と言いまわしのあらゆる美しさが感じられるようにしてやる[24]」ために読書を促すという教育の実践でもあった。つまり、エドメ

は、『エミール』をそっくりそのまま行うのではなく、本来一通りの教育をすでに終えているはずの年齢である 17 歳のベルナールに応じた教育を実践したのだった。

二点目は、本来行われるべき、消極教育と積極教育のうち、後者の積極教育しか行われないということだ。これは一つ目にあげたラテン語教育の省略と同様に、ベルナールの年齢に起因する。ルソーは子どもが大人へ成長する過程を「子ども」「青年」「成人」の三つに分け、さらに「子ども」の段階をその感官と理性の目覚めによってさらに三つに分けた。主に教育を必要とする過程は「子ども」と「青年」の期間にあり、その前者で行われることが、消極教育で、後者が積極教育である。具体的には、消極教育とは、「美徳や真理を教えることではなく、心を不徳から、精神を誤謬から守ってやること[25]」であり、「ゆがんだ人為的教育を排除し、自然と事物の掟を直接に学[26]」ばせる教育方法である。一方で、積極教育とは、教師と生徒の関係を友人同士の関係へと結びなおし、積極的な語らいによって、青年を愛情に満ちた存在にすることを目的とする教育方法である。

前述したとおり、ベルナールがエドメから教育を受ける時、彼は 17 歳でルソーの言う「青年」の段階にあった。そのため、エドメはベルナールに消極教育を受けさせることはなく、積極教育を受けさせるようにするのだ。しかし、この積極教育もエドメが意図したとおりに行われたわけではない。積極教育において、なによりも初めに重要なことは教育者と生徒が友人の関係になることだ。その友人関係に基づいた友情や感謝や尊敬の念から、生徒自ら教育者に教えを乞う姿を引き出させることで、周囲だけでなく自分自身に対しても愛情に満ちた存在にすることが出来るのだ。こうした積極教育をエドメやオベール神父は行うことが出来なかった。オベール神父は、ベルナールの教育の過程で、彼と「教育者と生徒」の関係を更新することが出来ず、友人関係を結ぶことが出来なかった。長い間迫害されていたという過去を持つオベール神父は、本能的な恐怖感によって人を信頼することが難しくなっており、それゆえにベルナールの欠点をひどく憎み、彼に対して厳しい眼差しを向けていた。そのことにベルナールも気づき、オベール神父に対して不信感を抱き、反発した態度を取っていた。そのため、形式的な教師と生徒の関係しか生まれず、二人の間に友人同士の語らいはおろか、エドメのようにオベール神父がベルナールを諭す場面も生まれなかった。一方でエドメにおいては、ベルナールに教育の過程で、彼の行いを諭し導こうとする場面はしばしば現れる。禁酒を勧めたり、オベール神父の教育を受けるよう諭したり、教育を受ける意味について語って聞かせたりする。こうしたエドメの語りかけは、ベルナールを新しい世界に連れ出しはするものの、彼の無知や無教養さのため、彼女の言葉の意味を完全に理解させることは出来ず、ましてや、道徳的な愛情を自身や周囲に抱かせることは出来なかった。そして、そもそもベルナールの野性的で直感的な恋心故に、二人の間には友人関係が成立することは出来なかった。

しかし、このようにエドメとオベール神父による積極教育が失敗する中、彼女らの意図しないところでそれは実現する。それは、ベルナールの最初の親友となるアーサーによって行われ

る。アーサーは、ベルナールがアメリカ独立戦争に参加した際に知り合った人物で、ベルナールは人生において同い年の同性に対する最初の友情をアーサーに抱く。彼は、「生まれながらに公平さを愛し、感情や道徳性に関するあらゆる問題を不謬の慧眼で判断[27]」することが出来る人物だった。アーサーとの関わりを通じて、ベルナールは次のように述べている。

> 彼は、最初から互いに不信感を抱いていた神父と私との間では神父が決して持ち得なかった影響力を、私に対して持っていたのです。彼は私に物質界の多くの部分を明らかにしてくれましたが、彼がもたらしてくれた最も貴重なことは、己自身を知り、己の印象について熟考するという習慣を私が持つようになることでした[28]。

こうした習慣の習得と、アーサーとの語らいを通じて、ベルナールは自己と周囲への愛情の拡大、つまり、自己と周囲の関係のより正確な認知をすることが可能となり、全教育の課程を終えることとなるのだ。実際、ベルナールは、6 年を経てアメリカからフランスへ帰国したときの様子を次のように回想している。

> 6 年の間に私の中では計り知れないほどの変化が起きていました。私は他の人達とほとんど変わらない人間になっていました。本能は愛情と、印象は論理とほとんどバランスがとれるようになっていました。この社会的教育は自然に行われました。経験から生まれる様々な教訓と、友情が与えてくれる助言を受け入れるだけで良かったのです[29]。

このように、アーサーという友人との語らいでベルナールは、エドメもオベール神父も成し遂げることが出来なかった積極教育をアメリカにいた 6 年という月日をかけて終えることとなったのだ。

三点目は、教育者が複数人いることだ。『エミール』では終始一貫して、家庭教師の「私」が一人でエミールの教育に携わるが、『モープラ』はエドメをはじめとして、オベール神父に、パシアンス、アーサーがベルナールの教育者として現れる。この点に関して、イヴ・シャスタニャレは、『モープラ』ではエドメの教育方針を実現する、数人の補佐役の教育者が現れ、それぞれの教育の成否が示されることを指摘している。実際に、成功例としてパシアンスを、失敗例としてオベール神父を挙げ、そのそれぞれの要因として、オベール神父はベルナールを知識で押しつぶしてしまったことを、パシアンスは、ベルナールを自然という偉大な書物の中で学ばせたことを指摘している。また、シャスタニャレは、オベール神父の失敗は、個々人に合わせた教育が出来なかったからだとも言及している[30]。しかし、本当にそれだけであろうか。エドメやオベール神父の、ベルナールの教育に対する態度は、次のように述べられる。

彼らは私の将来を予測して最初から自惚れていて、まるで野蛮人を文明化することだけを一生の仕事にしているかのようでした[31]。

さらに、彼らの様子に関して次のように言及されている。

神父とエドメは上手いやり方をしたにもかかわらず、私の進歩を喜びすぎるという過ちを犯しました。彼らは私の粘り強さをほとんど期待していなかったので、私の高い能力を大層褒めました。おそらく、彼らにしてみれば、私の成長のために行った彼らの哲学的思考の成功を大げさに見て、個人的に勝ち誇った気持ちになる部分があったのでしょう[32]。

この結果、ベルナールの尊大な虚栄心を育てることになる。これらのことを合わせて考えると、オベール神父の教育の失敗は、個々に合わせた教育法が実践できなかったということよりも、ベルナールの教育の目的に隠れた、自らの哲学的実践に対する自惚れにあると考えられないだろうか。ベルナールを「文明化された人間」へと成長させるという第一の目的が、教育の過程を通じて、いかに『エミール』の実践で結果を出すことが出来るかという目的にすり替わっているようである。

ベルナールは「文明化された人間」となるためにいくつかの教育段階を経ることとなるが、エドメとオベール神父は、その各段階で喜びを表す。一方でパシアンスは、最後の段階を経るまでは喜びを表さない。パシアンスは、ベルナールがアメリカから帰国した後に、全ての教育を終えて洗練されたベルナールに賛辞を送るが、それ以前のベルナールに彼の成長に喜びを表す描写はないのである。その要因として、『モープラ』においてパシアンスは預言者として人々を正しく導く存在である、ということが考え得る。井下継実は、パシアンスの本名が、フランス語で聖ヨハネを表す Jean であることとともに、彼が『モープラ』において、「神の言葉を人間に取り次ぐ預言者」として描かれ、単なる未来の予測だけでなく、人々をその言葉によって導く存在として現れている、と指摘している。また、井下は、パシアンスは「知性」ではなく、「叡智」によって物事を判断するため、エドメやオベール神父には見分けられない不正や偽善を見抜くことが出来、粗暴なベルナールのうちにある誠実さを誰よりも早く見抜いたことも指摘している[33]。このように、パシアンスは自身の性質と慧眼によって、エドメやオベール神父と異なり、自分との関わりにおいてベルナールを惑わすことなく、常にあるべき道を示し続けたのだといえるだろう。

以上のように、大きく三つの点において、『モープラ』では『エミール』とは異なった教育方法が見られた。『モープラ』は『エミール』の教育を実践した物語であるという側面が大きいに

も関わらず、こうした相違が見られる理由には、やはり『モープラ』がより実用的な教育方法を意識した経験の物語であるということが考えられるだろう。ジョルジュ・リュバンも指摘するように、『モープラ』と『エミール』の決定的な違いは、前者が実用的な精神に基づくのに対して、後者は体系的な理論に基づいているという点だ(34)。サンドの人間と教育に対する思想は、ベルナール老人の言葉に表れている。

> 私の愛しいエドメの旧師であるジャン＝ジャック・ルソーが理解しているように、人間は生まれつき悪人でも、善人でもありません。人間は生まれつき、多少なりとも情熱を持ち、その情熱を満足させるために多少なりとも活力を持ち、社会においてそれを利用、または悪用するための能力を多少なりとも持っているものです。けれども、教育はあらゆるものに対する救済手段を見つけることが出来るし、また、そうでなくてはなりません。そこには解決すべき重大な問題があります。それは、特にそれぞれに相応しい教育を見つけることです。一般的で共通の教育は必要に思われますが、だからといって、それは教育が万人にとって同じものでなければならないということになるでしょうか？(35)

人間はそれぞれ違っているのだから、それに合わせて各人に合った教育を行うべきだとサンドはベルナール老人の口を借りて主張しているのだ。そもそも『エミール』で説かれる教育論をそっくりそのまま行うことは難しい。エミールは孤児であるという前提条件があったり、子どもの成長に害を与える人為的なものを排除することは、社会活動を行う上で限界があったりするように、ルソーの教育の理想論は実際に行うとなれば不可能な部分が生じるだろう。そうした中で、『モープラ』は、『エミール』の教育論における理想と現実の齟齬を、実践を通じてエドメたちに解消させようとする。例えば、前述したように『モープラ』では、ベルナールの教育を開始する年齢がエミールと比べて遥かに遅い。そのため、エドメらはベルナールに合わせた教育方法を試行錯誤することとなる。また、シャスタニャレが指摘するように、『エミール』では、生徒を間違いから遠ざけるのに対して、『モープラ』ではベルナールはすでに誤謬と不徳を抱えた状態から教育を開始するため、間違いから学ばせるという姿勢を取ることも、この『モープラ』の実用的な教育論としての側面に現れているだろう(36)。

以上のことから、『モープラ』は『エミール』の教育論を基盤にしつつも、いかに非現実的な理論を現実で実践していくか、という点に焦点が当てられていると言えるだろう。そのため、『モープラ』では、エドメはオベール神父やパシアンスといった他の教育者と協力して、失敗と成功を繰り返しながら、ベルナールを「野性の子ども」から「文明化された人間」へと成長させるために教育を施しているということが指摘できる。

4.「母親と息子」の関係

エドメは、アメリカから帰国したベルナールの成長に対して、「母親が息子を自慢に思うように嬉しいです[37]」と喜びを表した。この場面から分かるとおり、エドメはベルナールに対して、教育者としてだけではなく、母親としての役割も負っていた。同様に、ベルナールもエドメに対し、幼少期に亡くした母親の面影を重ね、しばしば、まるでエドメの息子のように振る舞い、二人の間には、教師と生徒という師弟関係だけではなく、母親と息子という疑似親子関係が成立していた。

では、なぜエドメはベルナールに対して母親のように振る舞ったのだろうか。その理由は、大きく分けて次の二点である。

一点目は、エドメには生得的な母性が備わっているということだ。

19 世紀のフランスでは、女性は母性が本能的に備わっていると考えられており[38]、サンドも女性は生まれつき母性を持っている、という考えを抱いていた。実際に、サンド自身も強い母性を持っており、それは実の子どもたちだけでなく、恋人たちにも大いに発揮された。ミュッセやショパンといったサンドの歴代の恋人たちは、その多くが年下であったり、病弱であったりと、彼女にとって庇護欲をかき立てられる男性が多く、彼女は彼らに対してまるで母親のように甲斐甲斐しく世話をやき、息子のように接していた。その様なサンド自身と同様に、彼女の作品の女性たちも生まれながらに母性を持った存在として現れる。それはエドメも例外ではない。実際、エドメは初めてベルナールと出会ったときから、彼に対して「かわいい人（mon cher enfant）[39]」と呼びかけ、子どもを相手にするような様子も見せている。そのように生まれながらに母性が備わっていることによって、エドメは無意識のうちにベルナールに母性を発揮させ、母親として振る舞うことになったのだ。

二点目は、エドメはルソーの思想の影響を強く受けているということだ。一点目で述べた生来の母性によって、無意識的に母親のような言動をとることとは別に、エドメが意識的にベルナールの母親の役割を負っている様子がしばしば見受けられる。物語の後半で、全ての教育を終えたベルナールがこれまでの自身の粗暴な行いを反省して、エドメと結ばれることを諦め、立ち去ろうとした際、ベルナールを愛しているエドメは「結局あなたは、私があなたと距離を置いて、母親の役目を果たしていたから私を罰したいのですか？[40]」と彼に問いかける。この発言から、エドメが意図してベルナールの母親として振る舞っていたことが分かる。また、「距離を置いて」とあるように、ベルナールが「文明化した人間」となるまで、エドメはベルナールの恋心に応じず、彼との関係を教師と生徒の関係や母親と息子の関係にとどめていたというのだ。つまり、エドメは教師や母親を演じることでベルナールと心理的距離を取っていたのである。

では、なぜエドメはここで敢えて自分は教育者ではなく、母親を演じたと述べたのだろうか。

ここにもやはり『エミール』の影響があると指摘できる。

エドメはベルナールに対して、知的な成長だけでなく、精神的な成長も期待していた。というのも、エドメがベルナールに対して我慢ならないことは、彼の粗暴な態度以上に、彼が粗野な感情や思想しか持ちあわせていないことであったからだ。エドメはベルナールに教育を通じて、「立場や義務や感情について考えなければいけないこと(41)」を学ぶことで、「言葉遣いや態度や感情を改め(42)」ることを期待したのだ。そのためには、ベルナールの知的形成を促す教育者だけではく、精神的形成のための存在が必要だったのである。それは当時、母親の役割だった。母親の役割に対する当時のフランスの社会的風潮に関して、E・バタンテールは次のように指摘している。18 世紀末から、母親に自身の手で子どもの世話をするように勧める書物が多く出版され、近代国家の形成と共に、母親という存在の見直しが行われた。それにより、母親は単に子どもを生み、乳を与えるだけでなく、子どもの教育と知的形成の重要な一部を受け持つべき、と考えられるようになった。そのような役割の拡大と共に、子どもに道徳価値を教えるしつけこそが母親の「もっとも高尚な仕事」であり、母親は子どもにとって最も必要な教育者、さらには子どもの幸福の「大責任者」と考えられた。そして、このような新たな母親像の普及に『エミール』が大いに貢献した(43)。

ルソーは『エミール』の中で母親のあるべき具体的な姿について、「子どもを育てるには、忍耐とやさしい心づかい、どんなことにも失望させられない熱意と愛情が必要(44)」で、子どもと父親を含めた家族の和合の維持へ自身を犠牲に捧げなければならない、と主張している。つまり、ルソーの主張する母親像では、献身と忍耐が強調されているのである。この姿は、エドメのベルナールとの関わりの際にも見られる。代表的な場面を二つ挙げる。まず、ベルナールが病気で伏せってしまったときの様子である。エドメは、朝の 5 時に部屋でひざまずいて彼の回復を祈るほど、熱心に看病にあたっていた。ベルナールはその様子を「惜しみなく与えられた母親の気遣いだった(45)」と述べている。

次に、エドメがベルナールの素行を諭すときの様子である。ベルナールを優しくも厳しい調子で諭す様子には、彼を「絶望させる忍耐強さ(46)」が現れていた。

このように、エドメはベルナールとの関わりの内で、ルソーが理想とする母親像の象徴である献身や忍耐を見せる。また、ベルナールの教育方針をエドメが全て決めていたことも、母親が子どもの教育に全ての責任を負っていた様子に共通するだろう。この教育者としての姿と母親としての姿が重複する様子は、バタンテールが指摘する「母親＝教育者」という観念に通じる。バタンテールは次のように指摘する。相手を知り尽くしている者しかよい教育者にはなることはできない。そのため、献身や忍耐という子どもとの関わりを通じて、誰よりも子どものことに詳しい母親こそが、家庭教師よりもよい教育者となる。そしてついに母親は、精神的形成だけでなく、知的形成の担い手となり、子どもの全責任を負う教育者となるのだ(47)。こうした時代の流れによる母親の役割の拡大と共に、母親が子どもの教育者としての役割を負うこと

となった。エドメはベルナールの知性と精神の両方から人格を完成させるためにも、ベルナールに最も近い女性として、『エミール』をもとに教育者と母親という二重の役割を負うこととなったのである。以上のように、教育者としてだけではなく、母親として振る舞う様子にもルソーの思想の影響があるのだ。

以上より、エドメが母親としての役割を負った理由は、彼女に備わる生来の母性と、ベルナールの成長における母親の存在の必要性という二点にあるが、その背景に注目すると、エドメにはロールモデルとしての母親が欠如していたという問題が指摘できるだろう。これは『モープラ』において、前述したようにエドメが男性に従属しない女性となるために必要な、より自由な女子教育を可能にするためには欠かせない条件である。しかし、同時に母親の不在はエドメにとって倣うべき対象が喪失しているということも意味している。つまり、彼女は、自由な幼少期の教育を享受する代わりに、女性としての生き方を母親に習うことなく、自ら模索せねばならない、という問題を抱えることとなったのだ。これを解消する役割を果たしたものが、生得的な母性とルソーの思想である。生まれながらに母性が備わっていることで、エドメは誰に教えられるでもなく、ベルナールの母親という役割を自発的に引き受けることになった。さらに、その具体的振る舞いは、彼女が信奉するルソーの思想によって導かれることとなったのだ。

このようにエドメの母親としての姿にルソーの影響がみられることに関して、サンド自身もルソーの思想に共感していたということを併せて指摘しなければならないだろう。ただし、これは、単にサンドの思想がルソーの思想に取り込まれていたということを意味するのではない。女性は生まれつき母性を持ち、献身的に子どもに尽くすものであるという母親像をサンドとルソーが共有していることを意味する。しかし、『エミール』で理想の女性として登場するソフィーが男性を補完する従属的な存在であることとは対照的に、サンドが創作したエドメは母親不在の幼少期を送った上、元々男性的な性質を備えており、男性に自ら働きかけていく主体的な存在として描かれていることは着目されるべき点だろう。

5. おわりに

本稿では、エドメがベルナールに対して教育者と母親の二重の役割を負っているという観点から、ルソーの『エミール』がどのように『モープラ』に影響を与えているのかという点について問い直した。この 2 作品間の相違や一致は、それぞれにある根本的な特徴の違いによって生まれていると考えられる。『エミール』は合理的で体系的な教育論であるがゆえに、どこか一つでも前提が異なればその実践は難しくなるという特徴がある。一方で、『モープラ』は老年のベルナールが当時を回想して若者に語って聞かせるという形式を取るため、『モープラ』で語られる教育論は個人的経験に基づいた、より実践的ものとして現れるという特徴を持つ。この背

景には、人はそれぞれ異なるのだから、個々に合わせた教育が必要である、というサンドの思想がある。それは、物語の終わりにベルナール老人が語った「一般的で共通の教育は必要に思われますが、だからといって、それは教育が万人にとって同じものでなければならないということになるでしょうか？[48]」という言葉に現れている。これは、ルソーがあくまで社会のための個人の形成という目的に沿った教育論を唱えたことと対照的である。一人の人間が、その人らしい価値を持つためには、社会の中の一人としてではなく、唯一無二のその人自身を愛する必要があるのだ、というのがベルナール老人の語りを通したサンドの主張である。サンドは、ベルナールの成長を通して、教育では理論以上に愛情が必要であることを強調したと言えるだろう。そのため、エドメはベルナールの教育者としてだけではなく、母親という役割も負ったのではないだろうか。

注

(1) George Sand, *Mauprat*, édition présentée, établie et annotée par Jean-Pierre Lacassagne, Gallimard, 1981, p. 188（和訳は、引用者が小倉和子訳、『モープラ』、藤原書店、2005 年を参考に行った).
(2) 「文明化された人間」とは、具体的には野蛮人の対となる、教養があり理性的な人間のことを本論では意味する。
(3) *Ibid.*, p. 154.
(4) *Ibid.*, p. 154.
(5) *Ibid.*, p. 222-223.
(6) ソフィーとは、エミールの妻になる女性である。彼女は、ルソーの示す女子教育の結果、エミールに相応しい理想的な女性、つまり、男性を補完する存在として現れる。
(7) ルソー、『エミール（下）』、今野一雄訳、岩波文庫、1964 年、p. 20.
(8) ルソー、前掲書、p. 21.
(9) *Ibid.*, p. 189.
(10) ルソー、前掲書、p. 32-33.
(11) *Ibid.*, p. 187-188（下線は引用者。今後、引用における下線は全て引用者によるものである).
(12) *Ibid.*, p. 155.
(13) *Ibid.*, p. 154.
(14) 井下継実、「ジョルジュ・サンド『モープラ』に見る〈自立的個人〉の理想：女主人公エドメの人物像から」、『女性学研究』（大阪府立大学女性学研究センター論集）、26 号、2019 年。
(15) ルソー、『エミール（上）』、今野一雄訳、岩波文庫、1962 年、p. 135.
(16) 西尾治子、「ジョルジュ・サンドの女性思想―その両義性と現代性―」、『フランス語フランス文学』（慶應義塾大学日吉紀要）、第 54 号、2012 年、p. 53.
(17) *Ibid.*, p. 204.
(18) *Ibid.*, p. 203.
(19) 桑瀬章二郎、『ルソーを学ぶ人のために』、世界思想社、2010 年、p. 135.
(20) ルソー、『エミール（中）』、p. 115.
(21) *Ibid.*, p. 203-204.
(22) ルソー、『エミール（中）』、今野一雄訳、岩波文庫、1963 年、p. 282.
(23) *Ibid.*, p. 203.
(24) ルソー、『エミール（中）』、p. 282.
(25) ルソー、『エミール（上）』、p. 132.
(26) 吉澤昇、為元六花治、堀尾輝久、『ルソー　エミール入門』、有斐閣新書、1978 年、p. 12.
(27) *Ibid.*, p. 245.
(28) *Ibid.*, p. 245.
(29) *Ibid.*, p. 280.
(30) Yves Chastagnaret, « *Mauprat*, ou du bon usage de l'*Émile* », *Présence de George Sand*, nº 8, mai

1980, [« George Sand et Rousseau »].
(31) *Mauprat*, *op. cit.*, p. 217.
(32) *Ibid.*, p. 210.
(33) 井下継実、「〈言葉〉の物語としての『モープラ』: パシアンスを中心に」、『人間社会学研究集録』、11 号、2016 年。
(34) Georges Lubin, « George Sand et l'éducation », *Nineteenth-Century French Studies*, Vol. 4, nº 4, Summer 1976, p. 450-468.
(35) *Mauprat*, *op. cit.*, p. 433-434.
(36) Yves Chastagnaret, « *Mauprat*, ou du bon usage de l'*Émile* », *Présence de George Sand*, nº 8, mai 1980, [« George Sand et Rousseau »].
(37) *Mauprat*, *op. cit.*, p. 280.
(38) 長塚隆二、『ジョルジュ・サンド評伝』、読売新聞社、1977 年。
(39) *Ibid.*, p. 103.
(40) *Ibid.*, p. 302.
(41) *Ibid.*, p. 170.
(42) *Ibid.*, p. 163.
(43) エリザベート・バタンテール、『母性という神話』、鈴木晶訳、筑摩書房、1991 年。
(44) ルソー、『エミール（下）』、p. 13.
(45) *Ibid.*, p. 226.
(46) *Ibid.*, p. 227.
(47) バタンテール、前掲書、p. 246.
(48) *Ibid.*, p. 434.

参考文献

George Sand, *Mauprat*, édition présentée, établie et annotée par Jean-Pierre Lacassagne, Gallimard, 1981.

ジョルジュ・サンド、『モープラ』、小倉和子訳、藤原書店、2005 年。

Yves Chastagnaret, « *Mauprat*, ou du bon usage de l'*Émile* », *Présence de George Sand*, nº 8, mai 1980, [« George Sand et Rousseau »].

Georges Lubin, « George Sand et l'éducation », *Nineteenth-Century French Studies*, Vol. 4, nº 4, Summer 1976, p. 450-468.

Michel Gilot, « La présence du XVIIIe siècle dans *Mauprat* », *Présence de George Sand*, nº 23, juin 1985 [« George Sand et le XVIIIe siècle »].

Martine Reid, « *Mauprat*, mariage et maternité chez Sand » in *Romantisme*, nº 76, 1992, p. 43-59.

Schaeffer Gérald, « « Nature » chez George Sand : une lecture de *Mauprat* » in *Romantisme*, n° 30, 1980, p. 5-12.

Suzanne Mühlemann, « *Mauprat*, ou la création de l ' homme », *Présence de George Sand*, nº 8, mai 1980, [« George Sand et Rousseau »].

Yvette Bozon-Scalzitti, « "*Mauprat*" ou la belle et la bête », *Nineteenth-Century French Studies*, Vol. 10, nº 1/2, Fall-Winter 1981-82, p. 1-16.

秋葉英則、『「エミール」を読みとく』、清風堂書店、2005 年。

井下継実、「ジョルジュ・サンド『モープラ』に見る〈自立的個人〉の理想：女主人公エドメの

人物像から」、『女性学研究』（大阪府立大学女性学研究センター論集）、26 号、2019 年。
井下継実、「『モープラ』における〈劇場性〉」、『人間社会学研究集録』、12 号、2016 年。
井下継実、「〈言葉〉の物語としての『モープラ』: パシアンスを中心に」、『人間社会学研究集録』、11 号、2016 年。
石橋美恵子、「《*Mauprat*》におけるフェミニズム―その成立前後の事情をめぐって―」、『フランス文学論集』、4 巻、1968 年。
稲田啓子、「サンド小説『モープラ』における「家」と「結婚」」、『年報・フランス研究』、43 号、2009 年。
エリザベート・バタンテール、『母性という神話』、鈴木晶訳、筑摩書房、1991 年。
桑瀬章二郎、『ルソーを学ぶ人のために』、世界思想社、2010 年。
高岡尚子、『摩擦する「母」と「女」の物語―フランス近代小説にみる「女」と「男らしさ」のセクシュアリティ―』、晃洋書房、2014 年。
長塚隆二、『ジョルジュ・サンド評伝』、読売新聞社、1977 年。
西尾治子、「ジョルジュ・サンドの女性思想―その両義性と現代性―」、『フランス語フランス文学』（慶應義塾大学日吉紀要）、54 号、2012 年。
日本ジョルジュ・サンド研究会、『十九世紀フランス女性作家　ジョルジュ・サンドの世界　生誕二百年記念出版』、第三書房、2003 年。
日本ジョルジュ・サンド学会、『200 年目のジョルジュ・サンド　解釈の最先端と受容史』、新評論、2012 年。
深谷哲、「ジョルジュ・サンドの「モープラ」～成立過程とその構成～（1)」、『人文科学』（愛知学芸大学研究報告）、第 12 巻、1963 年。
深谷哲、「ジョルジュ・サンドの「モープラ」～成立過程とその構成～（2)」、『人文科学』（愛知学芸大学研究報告）、第 14 巻、1965 年。
持田明子、「*Mauprat* に見る〈絶対の愛〉と〈自己形成〉」、『九州産業大学教養部紀要』、第 27 巻、2 号、1990 年。
持田明子、「George Sand はフェミニズムを標榜したか（Ⅰ）*Indiana* を読む―メタファーとしての奴隷、隷属 l'esclave, l'esclavage を中心に―」、『九州産業大学教養部紀要』、第 24 巻、 2 号、1988 年。
持田明子、「George Sand はフェミニズムを標榜したか（Ⅱ）―フェミニストたちと向かい合って」、『九州産業大学教養部紀要』、第 25 巻、1 号、1988 年。
持田明子、「George Sand はフェミニズムを標榜したか（Ⅲ）―*Lettres à Marcie* を読む」，『九州産業大学教養部紀要』、第 25 巻、3 号、1989 年。
吉澤昇、為元六花治、堀尾輝久、『ルソー　エミール入門』、有斐閣新書、1978 年。
ルソー、『エミール』（全三冊）、今野一雄訳、岩波文庫、1962-64 年。